

竹材2件

採集用鎌と竹べら

高橋 勝雄

採集用鎌

材料：(1) 野生の篠竹、長さは長めに切り取る。冬の乾燥時、出生2年物。(2) 太さを改めて事前に釣具店に行ってジョイントを購入、但し注意すべき点はジョイントには2種類あり(鎌用、玉網用)、十分な注意が必要で、購入時店員さんに確認した方が間違いないと思います。(3) 竹材はジョイントより穴のちいさ目を選びます。その理由は、大きいと抜けてしまうので少し細めのものを選びます。

切れ目を入れ(4カ所)、べら柄の切断した竹材を細くけずり、木工用ボンドを塗り乍ら打ち込んでいきます。打ち込む竹材の「頭」は2～3cmを下2本より長くして、これからしめつけるナイロン製の糸の補強場に残しておきます。これが終わると長く切断した籐の巻き付けに入ります。

ここからが鎌の出来上がりをする一番大切な作業に入ります。長い籐の裏側に木工用ボンドを徐々に塗りつけ、それを力強くシメ付けていきます。そこが大事な作業です。シメ付が弱いと籐がもり上がり良い製品はできません。木工用ボンドはウラ側に良く塗りつけ、力強く巻いてゆくことが大切な作業です。

籐が巻き終る最後は2～3cm長く出した竹材の力を利用し、最後に力強いしめ付けをし、2～3回ナイロン紐を結びます。

その作業が終ると次には強力接着剤の塗布に入ります。直接手にふれない様に薄いゴム製の手袋を用い、籐と糸が動かないよう一滴一滴落としてゆきます。その中で一番大切な場所はジョイントと竹材の間、シメ付けたナイロン糸の結び目です。その工程を終え乾くのを待ち、次の作業に入ります。

次は乾いた籐を傷めない様、デッキブラシを用い横に一筋動かし汚れを落してゆきます。その作業が終るとみがきに入ります。

とぎめの低いサンドペーパー(100番位)を静かに動かし光沢を付けます。そしてやわらかい毛ブラシを用い汚れを落とします。この作業が終ると、この鎌の一番大切な段階に入ります。それはウレタン樹脂の塗り付けです。この製品の完成の命です。

風の無い日中を選ぶ事が大切です。風があると倒れたりゴミが付く事があるからです。

初めににぎり(上)より一気に塗り始めます。そしてダマ(カタマリ)の出来ない様に回し乍ら籐の巻いた所迄塗って、ゆっくりと回し乍ら作業を進めます。そして半日の乾燥を待ち、今度は取付口の方から籐の終り口迄樹脂を塗り乾燥を待ちます。乾燥が終われば、籐の下まで十分な位塗って乾燥を待ちます。

乾燥が終るとふたたびデッキブラシを用い汚れた物を除いていきます。最後にサンドペーパー100番位を用い静かに行います。そして毛ブラシを用いて汚れを落とし、採集鎌が完成となります。

竹べら

材料：冬場の竹林で厚さのあるモーソー竹、しかも湿り気の無いものを切り出す。その時点の長さは適宜、切り出した竹材は一年間室内及び外部で乾かし次の作業へと進みます。

竹べらの長、中、短の幅を決定していきます。ニギリ部分の長さが出る位に切断します。切断して出た部分は強度* *が増します。

打ち込んだ部分にワレのこない様に注意しながら、ボンドを塗り、間には動かぬ薄い竹材を打ち込みます。竹材の感想を待ち、次は火入れの作業に移ります。

火入れはガスの火を用い乍ら、なんどもサンドペーパー（粗い）を用い、形を整えていきます。また、ニギリ部分も乾燥していきます。同じ工程が終わると次は籐の巻き付けに入ります。

タコ糸の強度のあるものを用い、木工用ボンドを裏側に塗り、強く貼り付けていきます。この作業も籐の巻き方で出来上がりの良し悪しが出てきます。上下の巻き付けが終わり、乾燥が終われば再びデッキブラシを用い、汚れたごみを落とします。

最後、再びサンドペーパー（100番）のやわらかいものを用い、光沢を出し、竹べらの完成を見るのです。きのこ同好会の皆様方、是非とも造っては如何でしょうか。

平成28年1月8日



2014年1月のスライド会で展示されたヒラタケ採集品

※編集幹事から

写真は、高橋さんがスライド会の小物展示に出品されたときのものです。毎年、竹べらはユニット鎌とともに登場、ドングリのコマや四つ葉のクローバーなどとともに、会員へプレゼントいただいております。「今年は、採集鎌・竹べら他、持参出来ずに申し訳ありません。皆さんも元気で自然を楽しんでください」とのメッセージが届いております。



2011年



2012年



2013年